

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 3 月 30 日現在

機関番号：55301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381335

研究課題名(和文) 高等専門学校における発達障害学生のキャリア形成支援プログラム開発

研究課題名(英文) Development of Career Formation Support Program for Students with Developmental Disorders in College of Technology

研究代表者

江原 由美子 (EHARA, Yumiko)

津山工業高等専門学校・一般科目・講師

研究者番号：70560449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、高等専門学校(高専)の教育体系に合った特別支援教育の構想と、発達障害学生のキャリア形成支援プログラムの立案を目的としている。アンケート調査から、高専に在学する発達障害学生には、学生寮で生活する寮生の割合が高いことが明らかとなった。各高専の学生寮では、本人の特性に配慮し、日常生活や社会生活に必要なライフスキルを育む支援が行われている。ライフスキルを獲得し、生活を安定させることは、修学支援の効果を高め、卒業後の就労や自立した生活の基盤を作る。キャリア形成支援においては、全学生に対するキャリア教育(その一環としてライフスキルを指導)と個別の支援を併用することが有効だと思われる。

研究成果の概要(英文)：In this study, the purpose is a plan of special needs education suitable for the educational system of College of Technology and planning of career development support program for students with developmental disorders. From the questionnaire survey, it was revealed that the proportion of living in the dormitory for students with developmental disorders who are enrolled in College of Technology is high. In each student dormitory, support is given to nurture the necessary life skills in daily life and social life, considering the characteristics of the student. Acquiring life skills and stabilizing life will enhance the effect of supporting school education and create a foundation for employment and independent living after graduation. For career formation support, it is effective to combine career education for all students (guiding life skills as part of it) and individual support.

研究分野：人文学

キーワード：特別支援教育 キャリア教育 発達障害 ライフスキル 高等専門学校 学生寮

1. 研究開始当初の背景

高等専門学校（以下、高専）は、中学校卒業を受け入れ、5年間（商船学科は5年半）の一貫教育を行う高等教育機関である。現在、全国に国立高専が51校（55キャンパス）、公立高専が3校、私立高専が3校ある。高専も他校種と同様、年々特別な支援や配慮を必要とする学生、発達障害を有する学生が増え、修学や就労の支援で問題を抱えているところは多い。

しかし、その教育体系の独自性もあり、高専における特別支援教育に関する研究は大きく立ち遅れている。先駆的なものとしては、松崎俊明らによる研究（2005-2012年度、科学研究費補助金）があり、修学・就労における課題を明らかにしているが、個別支援やキャリア教育にまでは踏み込めていない。高専は実践的な技術者の養成を目指す学校であり、学生が卒業後、スムーズに社会生活や職場に適應できるようにするため、キャリア形成について考えることは非常に重要である。そこで本研究では、高専における発達障害学生のキャリア形成支援に焦点を当てることにした。

2. 研究の目的

本研究は、高専において、特別な支援や配慮のニーズを有する学生について、その特性を実証的に把握することにより、高専の教育体系に総合的な特別支援教育を構想すること、および発達障害学生が将来的に技術者として、社会的な位置を獲得するための特別支援キャリア教育プランを立案することを目的としている。

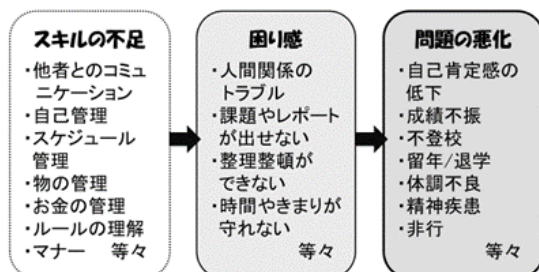
3. 研究の方法

本研究は、特別な支援や配慮のニーズを有する学生に日常的支援（修学や生活、および就労に関する支援）を行う過程で、実践の記述やデータ収集、およびその有効性の検証を行うことを軸として進める。

4. 研究成果

まず、高専における発達障害学生の実態を把握するため、研究代表者の所属校で日常的支援を行いながら、調査を行った。その結果、発達障害学生が抱える問題や困り感の背景には、様々なスキルの不足があることが分かった。

図1 発達障害学生の抱える問題や困り感の背景



また、発達障害を有する学生には、学生寮で暮らす寮生が多い傾向が見出された。発達障害を有する寮生には、修学や生活等での問題が生じていることも多く見られた。

そこで、高専における特別支援教育で最も立ち遅れており、可及的に整備しなければならないのは、学生寮における支援ではないかと考え、他高専の状況を把握すべく、中国地区8高専でアンケート調査を行った（記入式アンケート、回答者は各高専の学生相談室長（メンタルヘルス担当教職員の長）、回答は2014年6月1日現在）。

中国地区8高専に在籍する発達障害学生数は、表1の通りである。表中の「含グレーゾーン」は、グレーゾーンも含めた発達障害学生の数とその割合である。本調査でグレーゾーンは、医療機関の判断がある場合（正式な診断はおりていないが、疑いや傾向が指摘されている場合）、保護者の判断がある場合、中学校から発達障害の疑いや傾向に関する申し送り事項がある場合、複数の高専教職員の判断がある場合とした。

表1 中国地区8高専の発達障害の学生数と全学生中の割合

	A	B	C	D	E	F	G	H
診断あり	12 1.3%	15 1.4%	8 0.7%	7 0.9%	9 1.0%	0 0.0%	4 0.4%	2 0.3%
含グレーゾーン	18 2.0%	18 1.7%	11 1.0%	40 5.4%	不明 -	6 0.9%	10 0.9%	6 0.9%

また、中国地区8高専において、全学生に占める寮生の割合は、平均33.4%（最少：15.6%、最多：59.1%）である。表1と同様に、各高専における発達障害の寮生の数を示すと、表2のようになる。

表2 中国地区8高専の発達障害の寮生数と全寮生中の割合

	A	B	C	D	E	F	G	H
診断あり	5 1.3%	4 1.4%	2 0.5%	6 1.4%	3 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
含グレーゾーン	10 2.7%	6 2.2%	3 0.8%	31 7.1%	不明 -	1 1.0%	2 0.7%	2 0.7%

表1と表2を「含グレーゾーン」の部分で比較すると、4高専で、全学生に占める発達障害の学生の割合よりも、全寮生に占める発達障害の寮生の割合の方が高くなっている。また、寮での集団生活についていけない学生に退寮（自宅通学）を勧めた事例のある高専もあり、発達障害の学生が寮生である割合は高いと言える。

松尾秀樹(2014)「高等専門学校における特別支援教育と就労支援」(『発達障害とキャリア支援』金剛出版所収)では、高専に発達障害の学生が多い理由の一つに、寮があることが挙げられている。いじめ等の経験から環境

を変えたいという本人の思い、学生寮での集団生活の中でコミュニケーション能力の向上や自立を期待する保護者の思い、そして早期専門教育で就職が良いという高専の特色が、発達障害を有する寮生の多さに繋がっているのではないかと考えられる。

高専でも他校種と同様、特別な支援や配慮のニーズを有する学生に対し、早期対応・早期支援を心懸けている。受検前にオープンキャンパス等で相談を受け、入学・入寮前後に面談を実施し、入学後に生じた諸問題には複数の教職員で対応している。学生寮でも、指導寮生や寮母を置いたり、保健室や学生相談室、担任教員等と緊密な連携を取ったりして、当該学生への支援や指導を行っている。その他、学生寮での個別の支援事例としては、次のようなものが挙げられる（前掲の中国地区8高専でのアンケート調査による）。

- ・スケジュール管理の指導。
- ・登校を促す声かけ。
- ・整理整頓、片付けのサポート。
- ・洗濯をルーティンワーク化して指導。
- ・服薬のサポート。
- ・書類等のチェック。
- ・こまめに声をかけ、生活をサポート。
- ・居室を決める際、場所や同部屋となる学生の人選で配慮。
- ・クールダウンできる部屋を設置。
- ・必要に応じてカウンセリングを実施。

学生寮は生活の場であるため、個別の支援事例には、日常生活や社会生活に必要なスキル（以下、ライフスキル）を育むもの、本人の特性に配慮したものが多い。だが、学生寮には数百名の寮生があり、行える支援には限界がある。結果として、自己管理、時間や物の管理がうまくいかず、寮生活についていけなくなる学生が出てしまうこともある。

発達障害を有する学生の中には、学生寮は1日のスケジュールがほぼ決まっているため、見通しが立てやすく過ごしやすいという学生もいる。また、学生寮での集団生活を通して、学生には様々な面での成長が期待できる。しかし、寮生活に適應できず退寮となってしまう場合、学校を続けるには、自宅から遠距離通学するか、学校の近くで下宿するかを二択を迫られる場合が多い。どちらにせよ、自己管理やスケジュール管理が難しくなる可能性が高く、原級留置や退学に至ることもある。受検や入寮の前に、寮生活や高専という学校について、本人・保護者に十分な説明を行い、合理的配慮等について合意形成を行う必要がある。

ところで、寮生活に適應できず、問題が生じる学生は、発達障害を有する学生ばかりではない。いわゆる定型発達の学生にも、生活が乱れてしまう学生は存在する。そして、生活の乱れが問題となるのは、寮生に限らない。自宅通学生や下宿生も同様である。

生活が安定していない学生は、修学支援を行っても、期待する効果が出にくい場合が多々ある。例えば、就寝や起床の時刻が不規則で、時間の管理ができない学生は、授業への遅刻や欠席が多くなり、成績不振や欠課時数超過で単位の修得が困難になることがある。このような場合、授業内容に関する支援を行う以前に、授業に出席することへの支援が必要である。

以上のことから、ライフスキルの獲得は全ての学生において必要なことであり、キャリア教育の一環として指導を行っていくべきではないかと思われる。そして、学生寮における発達障害を有する学生への支援事例から、スキルの獲得が困難な学生に対しては、個別の支援も併せて行っていくことが効果的であると考えられる。

高専でもキャリア教育は行われているが、生活面に関するキャリア教育とも言えるライフスキルの育成は、あまり行われていない。ライフスキルを獲得し、生活を安定させることは、修学支援の効果を高め、卒業後の就労や自立した生活の基盤を作る。発達障害学生に対するキャリア形成支援は、ユニバーサルなキャリア教育に寄与し、中でも学生寮での支援や対応は、有益な視座を与えてくれる。

今後高専において行うことが望ましい、ライフスキルの獲得やキャリア形成に関する指導・支援には、以下のようなものがある。

【全学生に対する指導（キャリア教育）】

- ・衣食住に関すること（食事、掃除、洗濯等）
高専では家庭科の授業がないため、LHR や保健の授業等を利用して要点を指導する。
- ・時間やスケジュールの管理
LHR 等を利用し、行い方（視覚化、ICT 機器の活用等）を指導する。
- ・金銭管理
LHR や政治経済の授業等を利用して指導する。
- ・ルール、マナー、身だしなみ
LHR 等を利用して指導したり、専門家による講話を実施したりする。
- ・自己理解
LHR 等を利用し、進学や就職活動、卒業後のことを見据えて、トレーニングを行う。
- ・余暇の活用
課外活動や各種行事への参加を通して、トレーニングが行えるようにする。休憩時間や放課後の過ごし方に困り感を持っている学生には、個別に支援を行う。

【個別の学生に対する支援】

- ・他者とのコミュニケーション
SST を行い、スキルを身につけられるようにする。
- ・感情の起伏への対応
カウンセリングや個別の指導を行う。
- ・その他
必要に応じて、個別の支援や指導を行う。可能なら、発達障害を有する学生が、当事

者同士で話や活動ができる場を作る。また、卒業や中途退学時に、移行がスムーズにいくよう、困った時に相談できる場所とその連絡先等をまとめた冊子を配布する。

これらに関して、実践を通してデータを収集し、その有効性を検証することは、今後の課題としたい。なお、本研究の成果としては、以下のことも挙げられる。

- ・特別な支援のニーズを有する人々を社会的に包摂するための諸要素について、学校教育も含めた、広い文脈から理論的に検証した。
- ・特別支援教育やキャリア教育の観点から、体育授業プログラムを開発し、実践を通して検討を行った。また、障害者スポーツの普及に貢献した。
- ・合理的配慮についての指針、発達障害を有する学生が実験・実習を行う際の配慮や支援に関する指針を作成した(研究代表者所属校、外部発表未定)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

角谷英則,「情報保障概念の再定義」,『社会言語学 別冊』11, 2016, pp.67-72, 査読有

角谷英則,「漢字の問題化がすすまないのはなぜか 言語差別現象の一部としての漢字」,『ことばと文字』4, 2015, pp.113-120, 査読有

角谷英則,「学生に対するカリキュラム外支援と教員の「外部化」 ケア労働としての教育という視点から」,『日本高専学会誌』第20巻第3号, 2015, pp.39-42, 査読有

中山正剛・山本浩二・神野賢治,「レクリエーションの生活化」を視座に入れたレクリエーション支援の実践とその課題 宿題による介入を通して」『Leisure & Recreation(自由時間研究)』第40号 2015, pp.10-18, 査読有

[学会発表](計18件)

山本浩二,「レクリエーションと障害者スポーツ」(シンポジスト),平成27年度九州レジャー・レクリエーション学会別府大会,2016.3.6,於別府大学

江原由美子,「高専学生寮における発達障がい学生への対応・支援」,一般社団法人日本LD学会第24回大会(佐賀),2015.10.12,於福岡国際会議場

角谷英則,「情報保障の定義を再検討する」,日本言語政策学会第17回大会 2015.6.7,於椋山女学園大学

西田順一・橋本公雄・木内敦詞・山本浩二・谷本英彰,「大学体育授業における学修成果の可視化 学生の主観的恩恵に基づい

たプロフィール化の提案」,九州地区大学体育連合研修会,2015.3.15,於別府大学

中山正剛・山本浩二・神野賢治,「レクリエーションの生活化」を視座に入れた介入の効果 認知的介入とレクリエーションの宿題」,平成26年度九州レジャー・レクリエーション学会,2015.3.7,於福岡大学

西田順一・橋本公雄・木内敦詞・山本浩二・谷本英彰,「大学体育授業における主観的恩恵尺度の作成 学修成果の可視化に向けて」,第3回大学体育研究フォーラム,2015.2.9,於筑波大学東京キャンパス文教校舎

山本浩二,「社会性向上を意図した体育実技プログラムの実証的検討 新しい種目導入がもたらす効果に着目して」,第3回大学体育研究フォーラム,2015.2.9,於筑波大学東京キャンパス文教校舎

江原由美子,「学生寮における発達障がい学生への支援」,平成26年度女性研究者研究交流会,2014.12.15,於学術総合センター

打浪文子・角谷英則,「ノルウェーにおける情報保障 活字媒体『クラール・ターレ』について」,障害学会第11回大会(2014年度),2014.11.8,於沖縄国際大学

江原由美子,「中国地区学生寮における発達障がい学生への対応・支援に関する調査報告」,平成26年度中国地区高等専門学校学生相談室長連絡会議特別支援教育シンポジウム,2014.10.11,於呉工業高等専門学校

山本浩二,「自己成長を促す大学体育実技授業を考える」(シンポジスト),九州体育・スポーツ学会,2014.9.14,於別府大学

角谷英則,「学生支援と教員の『外部化』」,日本高専学会第20回年会,2014.8.30,於函館市国際水産・海洋総合研究センター

江原由美子,「発達障がいの学生に対するキャリア形成支援」,平成25年度女性研究者研究交流会,2013.12.20,於学術総合センター

松田修・角谷英則・江原由美子・長尾由加利,「津山高専の学生相談システムについて」,日本高専学会第19回年会,2013.8.31-9.1,於高知工業高等専門学校

角谷英則・長尾由加利,「特別支援におけるキャリア教育」,日本高専学会第19回年会,2013.8.31-9.1,於高知工業高等専門学校

江原由美子・長尾由加利,「発達障がいの学生に対する生活支援とキャリア教育」,日本高専学会第19回年会 2013.8.31-9.1,於高知工業高等専門学校

山本浩二,「特別支援教育を意図した体育授業プログラムの構想と実践」,平成25年度全国高専教育フォーラム,2013.8.21-23,

於豊橋技術科学大学
角谷英則,「ダイバーシティ教育の構想
特別支援教育から女子キャリア教育まで
」,平成 25 年度全国高専教育フォーラム,
2013.8.21-23,於豊橋技術科学大学

〔その他〕

シンポジウム開催(計2件)
平成 26 年度中国地区高等専門学校学生相
談室長連絡会議特別支援教育シンポジウ
ム,2014.10.11,於呉工業高等専門学校
特別支援教育に関する研究集会(電動車椅
子サッカーワークショップ,特別支援教育
に関する情報交換・ディスカッション),
2014.3.18,於津山工業高等専門学校

6. 研究組織

(1)研究代表者

江原 由美子(EHARA, Yumiko)
津山工業高等専門学校・一般科目・講師
研究者番号: 7 0 5 6 0 4 4 9

(2)研究分担者

角谷 英則(KADOYA, Hidenori)
津山工業高等専門学校・一般科目・准教授
研究者番号: 9 0 3 4 2 5 5 0

山本 浩二(YAMAMOTO, Koji)
北九州市立大学・基盤教育センター・准教
授
研究者番号: 5 0 5 6 0 4 4 7

松田 修(MATSUDA, Osamu)
津山工業高等専門学校・一般科目・教授
研究者番号: 6 0 3 4 2 5 4 9